学内発表会要旨

「雪国」の人物描写にみられる一傾向

是枝仁子

「雪国」を読んで、駒子よりも葉子の印象があざやかに残った。これはなぜだろうかと考えた挙句、次のような結論に至った。

原因は葉子の目、声の形容にあるらしいということ。葉子の声は、「悲しいほど美しく澄み通って、木魂しそうな声」であり、目は「刺すように美しい目」である。きわめて抽象的な形容であるにもかかわらず、そのありさまが、くっきりと浮かびそうな気がする。

刺すように美しい目が全体を形づくり、あたかも葉子の全体像が目に浮かぶような錯覚におちいる。しかもそれは、目を離れて他を見ようとすると、たちまちくずれさる。声の場合もしかり。

では、なぜこのように抽象的な表現でありながら印象的なのか。それについて次のようなことを考えてみた。

A、形容表現がほとんど形を変えずにたびたびくり返される。

B、形容の表現内容がより強い印象を与える言葉で成りたっている。

C、像の全体の中のごく一部だけが形容されている。

そこで以上の三点から、特にAを中心として「雪国」の人物描写について考察してみた。ここでは紙面の都合上、一番わかりやすい葉子の声の描写を例にとって考察をすすめていく。

なお、「くり返し」については、「解釈と鑑賞」の昭和三十二年二月号に波多野完治氏が、「川端康成の文章」の中で述べておられるので参照いただけたらと思う。（紙面の都合で引用略）

葉子の描写でくり返しの顕著にみられたものは、声と目と態度（様子）の形容であった。であるから、Cの問題はうなずける。

先に、ほとんど形を変えずにくり返されると述べたが、この言い方は少々不適当でもある。なんとなく同じくり返しであるかのようだが、必ずしもそうとはいえない。実はここに一つのしかけがある。同じくり返しだと思いこませるようなしかけである。

形容表現の要素の一つ一つはほとんど同じだが、その組み合わせ方がちがうのである。

◎葉子の声の形容

このくり返しの要素は次の五つである。

イ、悲しいほど
ロ、美しい
ハ、澄み通る
ニ、木魂する
ホ、あの聲

このうちホは、イ～ニをひっくるめた内容を持つと考えられる。

まず、実例を挙げてみよう。なお使用した本は、角川文庫版「雪国」である。参考までにページ数を各例の後に記しておいた。

(1)悲しいほど美しい聲であった。高い響きのまま夜の雪から木魂して來さうだった。（8）

(2)澄み上って悲しいほど美しい聲だった。どこかから木魂が返って來さうであった。（中略）、あの葉子の聲である。（50）

(3)「駒ちゃん、駒ちゃん。」と、低くても澄み通る、あの葉子の呼び聲が聞えた。（62）

(4)葉子の悲しいほど美しい聲は、どこか雪の山から今にも木魂して來さうに、島村の耳に殘ってゐた。（74）

(5)「駒ちゃん。」と、悲しいほど澄み通る聲で襖の陰から呼ぶ、あの葉子ではなかった。（95）

(6)……、あの悲しいほど澄み通って木魂しさうな聲で歌ってゐた。（96）

(7)雪の信號所で驛長を呼んだ、あの聲である。聞えもせぬ遠い船の人を呼ぶやうな、悲しいほど美しい聲であった。（中略）純潔な愛情の木魂が返って來さうだった。（106）

(8)……、葉子のあの美しい聲は聞えなかった。（112）

(9)……、その騷々しさの最中に思ひがけない近くから、澄み通った聲で、「御免下さい、御免下さい。」と、葉子が呼んでゐた。（117）

(10)「あら、お行儀の悪い、いやだわ。」と、その聲が驚くほど美しかった。（119）

(11)「女一人くらゐどうにでもなりますわ。」と、葉子は言葉尻が美しく吊り上るやうに言って、……（121）

(12)その笑ひ聲も悲しいほど高く澄んでゐるので、白痴じみては聞えなかった。（122）

(13)そしてあの聲で歌ひ出した。（124）

一つ一つの要素は、イはすべて「悲しいほど」で七例、ロは「美しかっ」、「美しく」がそれぞれ一例で他はすべて「美しい」で計八例、ハはかなり変化があり表出の順に「澄み上って」、「澄み通る」、「澄み通る」、「澄み通って」、「澄み通った」、「高く澄んで」となっており六例、ニは表出の順に「夜の雪から——木魂して來さうだった」、「どこかから——木魂が返って來さうであった」、「どこか雪の山から——木魂して來さうに」、「あの木魂しさうな聲で」、「純潔な愛情の——木魂が返って來さうだった」となっていて、五例である。ホについてはイ～ニと少し性格が異るので後でふれる。

イの前後にはロ、ハが多くきている。ロの前後にはイと「聲」が多く使われ、ハはイといっしょによく使われている。ニは作品の前半にしか出てこない。また、どこから木魂さうだと感じるのかも一つ一つ異なっている。

声の描写は全部で29センテンス（1センテンスは原則として、句点から句点までとした。）だから、イ～ニの各々のパーセンテージは、17～27%、全部を合計したものは80%近くになる。つまり声の描写の部分では、5センテンスに4個の割で、イ～ニの要素のどれかが使われていることになって、かなりくり返されていることになる。（Aの問題）なお、作品全体に対する葉子の声の描写のパーセンテージは1.4～1.6%となっている。

Bの問題について考えると、イ～ニはそれ

ぞれ抽象的ではあるが、「美しさ」を表わすことばだといえよう。それはたとえてみれば、「がらがらだがやさしい声」などというように逆接的なことばは、葉子の場合用いられていないという意味である。

イ～ハは葉子の声が現実離れした、人間というより妖精かなにかのようなものから発せられる声であるかのような印象を与え、さらには、葉子そのものが人間というより幻かなにかのように、捕えがたくすぐ消えてしまいそうなものであるかのごとく印象づけるのに効を奏している。

イがあってはじめてハは葉子の声が天上にすーっとのぼっていく感を与えてくれるようである。その意味ではハの一例目、六例目はおもしろい。

ニはイ～ハとはまた少し異なるようだ。つまり、ニはイ～ハが一センテンス内に隣接して用いられることが多いのに対して、センテンスをあらためたり、接続助詞「て」をもってきたりして、イ～ハとある距離をおいて用いられているのである。また、続きぐあいからみて、イ～ハをあわせたものとニとは同格的な位置にあるようだ。ということは、「悲しいほど美しく澄み通っている声」を表現を変えて「木魂しさうな声」といっているようだということだ。しかし、ニの四例目がかなりあいまいなので、はっきり同格ともいいきれない。

「木魂する」ということばは、「木魂のやうな」とはかなり意味がちがう。これは康成独特のものではないかと思う。葉子の声の描写では、このことばが一番重量感がある。このことばあるがため、葉子の全体像がことさらに幻のように思われ、非現実的美の世界を想起せしめるのだと言ってもよいかと思う。このことばは、「花のワルツ」とか「虹いくたび」などにも用いられている。

「木魂しさうな声」とは実際どんな声だろうか。わからないが、なんとなくわかるような気もする。そういう気を起こさせるのが康成の作品には多い。

ホについては、くわしい考察は省略する。「あの」と「聲」の間に修飾のことばがはいるかたちが多い。七例ある。

ホの暗に言わんとしている内容は、イ～ニを含む声だろう。そうすると、表現は全く異っているにもかかわらず、読者の頭にはイ～ニがパッパッとくり返されることになる。その意味では表現を変えたイ～ニのくり返しだともいえる。この表現を変えたくり返しは、この作品では非常に効果がある。

声の描写は他にもあるで、そのどれをとってもイ～ホのくり返しから受けるイメージをぶちこわしたり、逆効果になるような強い働きのあるものはない。当たりまえなことかもしれないが。このことを逆に考えると、イ～ホのくり返しによって、一つの所固としたイメージを与えようという意図を持っているのだといえよう。

紙面の都合で、葉子の声だけについてしか述べられなかったが、「雪国」では、駒子、島村についても各々特徴ある形容のくり返しがみられるということ、また、この傾向は単に、「雪国」だけのものではなく、「千羽鶴」とか「山の音」、「名人」その他多くの短篇においてもみられるものであるということを述べておきたい。

今後は、それらの他の作品にもあたってみて、比較、検討してみるつもりだが、今までザーッとみたところ、「雪国」の葉子の場合がもっとも典型的で、印象的なくり返しが使ってあるようである。

（昭和四十年九月二十日稿）

（本学学生四年）